

散

さんげ

華

上

紫式部の生涯

杉本苑子

平安朝の読書好きな少女式部が
胸にえがきつづける女の幸せとは

娘たちを政治の道具に権勢をほしいままにする藤原氏、一門ながら無欲恬淡な漢学者の娘に生まれ、世の不条理を懷疑しつつ、歌や物語の世界に真実の愛を求める式部の多感な青春を濃密に描く歴史大作。

中央公論社 定価1650円(本体1602円)

杉本苑子

散

さんげ

華

江苏紫式部学院图书馆

紫式部の生涯

书章

上

散華^{さんげ}——紫式部の生涯——上

©一九九二 検印廃止

一九九一年二月二〇日初版発行
一九九一年一月一〇日一〇版発行

著者 杉本苑子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二・八・七
振替 東京二・三四

散華（上）目次							
峠路の賊	5						
蜻蛉日記	63						
魔火	101						
麗ノ女御	177						
蓮の葉の露	251						
冬の季節	307						
死神	362						
夏ごろも	411						

装画
加山又造「夜桜」部分

散

(さんげ)

華

— 紫式部の生涯 —

上

峠路の賊

1

朝涼^{あさすず}のうちに出了たのに、子供づれの足ははかどらない。日岡^{ひのおか}の峠にかかるころには、もう晩夏の日ざしがじりじり頭上^{かみ}を灼^やきはじめた。

「暑くなりそうですねえ、今日も……」

喘^{あえ}いで言うのは、中年肥りしてきた乳母である。

「やはりご本邸からお借りしてでも、牛車^{ぎしや}でお出ましなさればようございました。春や秋とちがつて、野遊びの季節ではありませんもの」

「遊びじゃないわ。お墓参りよ」

乳母の愚痴^{ぐち}を、やんわり、周防^{すおう}は封じた。彼女は十七歳——。坂道も、日ざしの強さも、まだまだ一向に苦にならない。

まして子供たちは二人とも、元気いっぱいだった。小市君^{こいちぎみ}と呼ばれている女の子は七ツ、その弟の薬師鷹^{やくし まろ}は五ツだが、

「あぶない、あぶない。ころびますよ」

乳母の制止もきかずに、藪へ踏み込もうとしたりする。二人ながら周防の兄の子……幼い姪と甥たちである。

もっとも、峠路といっても京から大津へぬける東海道だ。道幅は広く、よく踏みかためてもある一本道だし、旅人の往来ははげしい。手を離れたところで、おいそれと迷子になる氣づかいはなかった。

「それに、小市ちゃんはっきりしているからねえ。七ツとはとても思えない。たのもしいところのある子だわ」

寸評を、周防は口にした。

「そうなんです。お姉上の大市君が、あの通りご病気がちな、引っ込み思案なご気性でしょう？ 播磨の国府にいらしたころも、亡くなられた母君にかわって、まだ赤ちゃんだった弟御のおむつを、たどたどしい手つきながら替えてやろうなどとあそばしたのは、小市さまでございましたよ」

「今からもう、どこことなく、おとなびた感じの子よねえ小市ちゃんは……。母上に、早く別れたからかしらねえ」

「母無し子になられたのは、ご姉弟三人ながら同じなのですから、やはり持って生まれたご氣質ではございますまいか」

「大市ちゃん、いまごろ淋しがつていないかな」

置いて来てしまった姉むすめの心情を周防は思いやったが、

「おなかをこわして臥せっておられる有様では、外出などとてもご無理でございますよ」

馴れているのか、乳母は氣にもとめない口ぶりで笑った。

「それにもともと、出歩くのはお好きでないので。国府の官舎でも、賑やかなあの飾磨しからまの市立いちだちの日ですら、お留守番なさるのはいつでも大市君ときまっていましたもの……」

「おかしな子ね。市の日に生まれたために、大市君と名づけられたくせに、ねえ」と、周防も笑った。

「小市ちゃんの名も、飾磨の市にあやかっつてつけたの？」

「いいえ、お妹君のほうは姉上の名が大市なので、あっさり、小市となさっただけらしゅうございますよ」

子供らの父の藤原ふじわら為時ためときは、権少掾ごんのしょうじょうに任ぜられて播磨の国府くふに下り、ながいこと都にいなかった。

許婚者いみなずけがあとを追って来、結婚も播磨でしたのだが、このほど、ようやく任はてて帰洛したときは、子づれのやもめになりさがっていた。大市、小市、薬師麿の三人を生んだあと、最後の産をこじらせて妻は播磨で亡くなったのである。

「安心なさいな兄さま、子供たちはわたしが育ててあげますからね」

周防の言葉に、

「何を言うんだお前、若い身そらで……」

たださえ話下手な、学者肌の為時は、どぎまぎ口ごもった。

「薬師麿には乳母が附いて来ているよ。花なら、これから開こうという娘ざかりのお前に、辛気しんきくさい子育てなどさせられるものか」

「聞く前にしぼんでしまったの。わたしという花はね」

できるだけ、ふだんは袖口の中へ隠している左手を、わざと兄の鼻先へ周防は突き出して、ひらひら振ってみせた。

少女のころ、母方の従姉^{いとこ}に当るさる内親王の御所へ、周防は勤めにあがった。ほんの、お身の回りの小間用を弁^いじる童女にすぎない。

内親王のおん名は庄子^{まさこ}——。周防の伯母の一人が、醍醐帝の皇子代明親王の妃となって生んだお子で、のち、村上天皇の後宮に入り、麗景殿^{れいけいでん}ノ女御^{にようご}と呼ばれたひとである。

「かわいい子だこと」

と、血つづぎの親しみから女御は目をかけてくれたし、父の藤原雅正が従五位下周防守だった縁にちなんで、『周防』と名づけてもくれたのだが、朋輩^{ほうはい}の粗相^{そそう}から左手に熱湯を浴びるという思わぬ災難^あに遭^あって、勤めをやめた。

事故の直後、あわてて布でしばったため、かえって治癒を遅らせ、周防の左手は小指、薬指、中指の三本が離れなくなっただばかりか、手の甲から手首にかけて醜^{みにく}いひきつれの痕^{あと}をのこす結果になってしまったのだ。

「一時は子供ごころに、尼になろうとさえ思い詰めたわたしですもの、開かぬ花で終る覚悟は、とうにできているのよ兄さま」

「そんな、お前……。たかが片手の、それも指三本のことじゃないか」

十年近い留守のまに、すっかり年ごろの、美しい娘に変貌した妹から、為時はつらそうに目をそらした。

「嫌なのよ、わたし。なまじ情^{じやう}が移ったあとでこの火傷^{やけど}の痕を見つけられ、男に逃げられるなんて……。そんなみじめを味わうくらいなら、さばさばとはじめから独りで生きるわ。兄さまがた

の厄介者になるわけだけど、よくって？」

「そりゃあ、かまわんさ。さして頼りにはならん兄貴どもだがね」

「わたし、本心はうれしいの。ものごころついたかつかないうちに母親に死なれた可哀そうな姪や甥を、手塩にかけて育てるなんて、やり甲斐のある仕事だと思わない？」

「まあ、そう言ってくれば、わしとしては気が楽なのだ。奉公人はしよせん、他人だし、あの子らを継母の手^{まは}にゆだねるのも^{ためら}遂^すわれるしなあ。叔母のお前に面倒をみてもらえれば、これに越す安堵はないよ」

「お礼はわたしこそ言いたいわ。生きてゆく張り合いができたんですもの」

乳母の告げ口によれば、妻の歿後、播磨の任地で為時は新しく通う相手を持ったらしい。

「上司にあたる播磨^{はりま}介^{すけ}どののお妹^{いもうと}ぎみでね、わたしらこっそり、介^{すけ}ノ御^ごとお呼びしてましたよ」

「どんな女^{ひと}? 美人？」

「さあ、殿^とがひた隠しになさっていたので、お顔だちまではぞんじませんが、京へおもどりあそばす前の年に、どうやら介^{すけ}ノ御^ごの腹に姫さまが誕生なさった模様でございます」

律儀^{りぎ}な日ごろの性格からすれば、子^こまでなした女を播磨^{はりま}に置きざりにして帰って来ることなど為時にはできまい。上司の妹ともなれば、なおさらである。

（一緒に伴^{ともな}ってか、それともひと足おくれてか、どちらにせよ介^{すけ}ノ御^ごやその生^なみの子を、兄さまは上^あ洛^{らく}させたにきまっている）

と周防は見ている。

（時おり夜になると出かけてゆくのも、介^{すけ}ノ御^ごのところ^{ところ}にちがいあるまい）
そう推量して牛飼^{うしがい}に訊くと、強いて口止めされてもいないのか、

「四条油小路でございます」

すらすら、母子の居場所をしゃべってしまった。以来、周防は、

「兄さま、隠しだてはご無用よ。何もかも承知してるのですからね。胸張って、油小路へお出かけあそばせ」

てれる為時を送り出すことにしたが、今年三十という兄の、男ざかりの生理からすれば、通う女の一人二人、無いほうがかえって不自然とも思えた。

本邸は一条京極の、賀茂川べりにあるけれども、そこへ介ノ御母子を迎え入れようとせず、あからさまにはその存在すらあかさずに、表向きどこまでも、やめぐらしをつづけ通している為時の態度に、むしろ三人の母無し子たちへの愛と気づかいを周防は感じる。

（いいわよ。兄さまが油小路へ出かける分だけ、余計にわたしがお前たちを可愛がってあげるからね）

若い叔母の、この思いが通じるのか、大市も小市も薬師磨も、そろって周防にすぐ、なついた。元来が子供好きなのか、周防も彼らがいとしくてたまらない。

「やい、播磨生まれの田舎っぺ。清水の観音さまさえおがんだことのないおのぼりさん。どこでも見物したければ言いなさい。花の都のすみずみまで案内してあげるからね」

からかうと、腕白坊主の薬師磨などむきになって、

「周防叔母さま、知らないからそんなこと言うんだよ。播磨の志深しじまの薬師さまなんて、すごくてつかい御堂だぞ」

くっかかる。

「御堂ばかり大きくなった、靈驗あらたかでなくっちゃ駄目よ」

「あらたかさ。母さまが子を見もったとき、『上の二人が女なので、今度は男の子をお授けください』って願掛けしたら、ちゃんとおれが生まれたんだものね」

「それで薬師曆って名前がついたのね？」

「そうだよ」

そこまで願いを聞きとどけながら、なぜ子らの母を、死の手から救ってやらなかったのかと、心の中で薬師如来を周防は責める。さすがにしかし、口に出してそれを言うのは憚られた。

せがまれるまま、あちこち子供たちをつれて周防は洛中の名所を見せて廻ったが、よろこんでついてくるのはいつの場合も小市であった。病弱な姉むすめの大市は、ほとんど誘いを断ったし、薬師曆はそのときどきの気分次第で、

「いやだ。お庭で蟬捕りしてるほうがいいや」

にべもなくはねつけるかと思うと、たとえば今日の墓参りのようにお弁当に釣られて、幼童には面白くもないはずの外出を、

「行こう行こう」

前の晩から待ち遠しがつたりする。

—— 目的地は日岡ひのおかの先の、栗栖野くるすのと呼ばれているあたりであった。

ここに為時や周防には母方の曾祖母に当る女性の墓がある。先祖にゆかりの深い寺や社も鎮っている。それらに詣で、道すがら摘み溜めた野の花を供えて、木蔭での昼餉ひるげを楽しもうという計画なのだが、

「何でしょうお乳母どの、あの人だから……」

行く手の峠路に目を据えて、周防は不審げに立ちどまってしまった。

「喧嘩かしら……」

「旅人が集まって騒いでますね」

「小さい人をつれてるし、もし撲り合いや斬り合いだったら近づかないほうがいいと思うけど……」

「見て来ましょう」

人立ちのうしろへ寄って行つた乳母は、すぐ引き返してきて、

「死人ですよ周防さま」

眉をひそめた。

「まだ若い男です。どうしたわけか禪ぜんひとつの素裸で、道のまん中に仰向けざまにころがっていますよ」

「まあ、気味がわるい」

「もつともこの節せつ、行き倒れなど珍しくありませんがね。どうなさいます?」

「亡骸なきがらなら物騒なこともないでしょう。そつと片脇を通りすぎてしまいましょよ」

「そうですね。さあ坊ちゃま、わたくしの背におんぶあそばせ。小市君きみは周防叔母さまのお手にしっかりつかまつて、急いで通り抜けるのですよ」

行きかけたとき、彼らと同じ粟田口あわたぐちの方角から馬にまたがった虎髭とらひげいかめしい武者が、五、六人もの郎党を従えて登って来た。

「好都合ですわ周防さま、あのお侍たちにくつついてまいりましょう」

「そうね。そのほうが心丈夫ね」

ところが人垣に近づいて、死人を目撃したとたん、侍は手綱を繰ってビタツと馬をとめてしまった。鞍からおり、郎党の一人に持たせていた弓を取って、背の胡籙をまさぐる。一瞬たりとも死人から目を離そうとしない。

なるほど乳母が言う通り、せいぜい十六か七にしか見えない色白の小冠者であった。裸体なのは解せないし、身体に切り傷や打撲のあとがないのも不思議である。ふつう行き倒れといえば老いさらばえて垢まみれか、瘦せかけて肋骨を浮かせた病人にきまっているのに、小冠者の肉付きは良く、肌もすべつくくなめらかに見える。

（心の臓に持病でもあって、急に故障を起こしたのかしら……）

周防はいぶかったが、死人以上に不可解なのは髭武者の素振りだった。雁股の矢を抜いて弦につがえ、弓を引き絞りながらそろりそろり、亡骸から三間も距たった道の端を摺り足で通って行く。

主人がこの用心深さだから従者どももおっかなびっくり、首をちぢめてあとにしたがう。主従七人に馬一頭、ようやく屍体のかたわらを通過し、二、三十間も行きすぎたあたりでそそくさ馬上に移ると、そのまま振り向きもせず大津をさして駆けくだって行ってしまった。

「なんだ、ありゃあ」

「こんな小僧ッ子の死骸一つにおじけづいて……虎髭が泣くわな」

どつと沸き上ったのはヤジ馬の嘲笑である。周防も呆れて、

「世間には、臆病な侍もいるものねえ」

「見かけ倒しとはこのことでございますね」

乳母ともども、譏り口を交しながら行きすぎかけたとき、また一人、今度は逆方向の大津側から侍が登って来た。

やはり馬に乗っている。飼い肥らせたなかなかの逸物だ。小ぎっぱりした水干袴を身につけ、これも弓、胡録で武装して、腰には太刀を横たえていた。

ただし、供はつれていない。単騎、身軽な旅をつづけて来たのだろう、散りかけた人だかりに気づいて、

「なんだ、そこに寝てるのは……酔っぱらいか？」
と近づいた。

「なあに、行き倒れでさあ」

「死人かあ、でも、病死とも思えんじやないか」

不用意に馬上から、弓箆で屍体をつつこうとしたその、瞬間だった。死人の腕が伸び、やにわに弓をひっ掴んだ。

「わッ」

驚いて手許へたぐろうとする力を巧みに利用し、若者は突っ立ちざま握りこぶしの一撃を待の下腹に見舞った。

悶絶し、馬から落ちたところへ飛びかかって、たちまち衣類を剥ぐ。太刀を奪う。弓矢一式すべてを片腕に掻い込むが早い、ひらっと鞍上に躍りあがり、そのまま馬腹を蹴って大津の方角へ駆け去ってしまったのである。

「盗賊だッ」

「死んだふりをして、獲物を待ち受けておったのじゃ」